

小泉友賢が見た「賀露浦」 ～ 賀露誌考研究会 研究報告 ～

江戸時代の学者・小泉友賢は、『賀露神社縁起』の中で、賀露浦の景色を「名勝」にふさわしい壮大な風景として記しています。以下、その概要を現代の言葉で紹介します。

「北には果てしない日本海が広がり、晴れた朝には遠くの船の帆が次々と連なって見えます。荒れた夕暮れには、雪山のような白波が水面に立ちます。浦の内側には大河が流れ込み、入り江や島々が広がる水辺には、鴨（かも）や鷺（さぎ）が群れ飛び、色鮮やかな魚が跳ねています。また、漁船や遊覧の小舟が浦を行き交い、舟歌や笛の音が響き渡ります。風と波が織りなす雄大な眺めは、中国の名高い景勝地にも並ぶほどの美しさです。」

賀露浦は、美しい自然と人々の暮らし、海運の活気が調和した、山陰を代表する景勝地だったのでしょう。その姿は、山田繁政氏所蔵の掛軸にも描かれています。静かな入り江には、漁船や渡し舟が浮かび、中央の屋形船には人々が集まっています。その様子は、酒宴や舟遊び、三味線や歌のにぎわいを思わせ、友賢が見た賀露浦の美しさを今に伝える情景となっています。



山田繁政氏所蔵の掛軸

一方で、賀露浦は千代川の氾濫や流砂によって幾度も姿を変えてきました。特に重要港湾に指定された後は大きく様相が変わり、小泉友賢が記した往時の面影は、今ではほとんど見るできません。

しかしその歩みは、千代川がもたらす災害と向き合いながら、賀露の人々が暮らしてきた歴史でもありました。今日、災害が少なくなり、安心して暮らせることに感謝するとともに、古の賀露浦のすばらしい姿を後世へ伝えていきたいと思います。